社会学部生・学部教育へのアドバイス*

——関西学院大学社会学部卒業生調査の分析（6）——

中　野　康　人**

1　本稿の目的

本稿の目的は、社会学部卒業生による学部教育ならびに現役学生へのアドバイスを紹介するとともに、学生時代とその後の経歴がもたらすアドバイス内容への影響を探索することにある。大学教育はどのようにあるべきか、また学生生活はどのようにあるべきか、規範論的に大学の「あるべき姿」を論じた論考や、専門家による現状分析や改革案を取り上げた大学論は枚挙にいとまがない。たとえば、進学率と高等教育の質の関係を、エリート段階－マス段階－ユニバーサル段階、という三段階にわけて論じるトロウ（1976）の理論は、その古典的代表であろう。

一方で、一般論ではなく、学生やその大学の卒業生を対象とした調査データから、現在そして過去の大学教育の経験に対する評価や今後のありかたに関する意見を募る試みも、少なくない。たとえば、吉本（2007）は、卒業生を対象とした調査を通して、大学教育の成果を評価する内外の試みを紹介している。そこでは、「教育と学習のプロセス」および「教育の成果」を、入学前の諸属性や卒業後の経験に関連づけて分析できるという、卒業生を対象とした大学評価の調査の利点が述べられている（図 1）。

また、山内（1994）、小方（1994）や金子（1994）は、広島大学の卒業生を対象とした調査にもとづいた分析を報告している。なかでも山内（1994）は、卒業生が大学に何をのぞんでいるのかを調べるために、大学教育のあり方を尋ねている。そこで取り上げられた項目は、（1）少人数の教育形態による発表や論文の表現技法の教育、（2）理論的な教育による論理的・体系的な考え方の習得、（3）理論的な教育よりも実務に役立つ応用的教育、（4）一般教養よりも専門を深める、（5）人文・社会科学の一般教養を身につける、（6）勉強よりサークルや友人関係を広げた方が有利、といったものである。山内（1994）は、これらの項目への回答が、卒業した学部毎に異なるか否かを分析している。

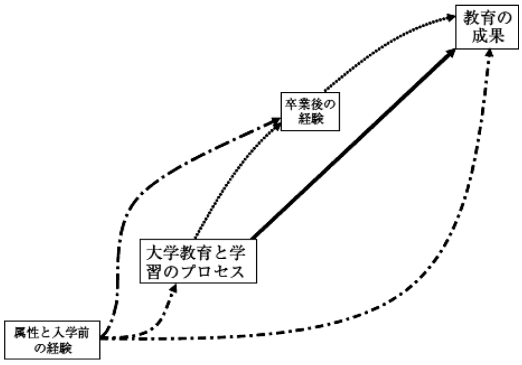

図 1　卒業生調査を通して得られるもの
（吉本（2007）より）

本稿で取り上げる主題も、山内らと同じく卒業生が大学にのぞむものにある。そして、吉本（2007）にあるように回答した卒業生の諸属性や在学中そして卒業後の経歴との関係を分析していく。これらの先行研究と本稿が異なるのは、分析の対象となるデータがいわゆる「自由記述」データだということである。つまり、調査者の視点（用意された選択肢）を評価してもらうのではな

*キーワード：大学教育、計量テキスト分析、卒業生調査
**関西学院大学社会学部教授

く、卒業生自身が自らの言葉で発する大学教育へのアドバイスをテキスト分析にかけて、卒業生の視点を抽出する探索的な分析を本稿ではおこなっていく。

2　分析の対象

分析の対象となるのは、関西学院大学社会学部卒業生調査のデータである。関西学院大学社会学部では、2009 年 9 月から 2010 年 1 月にかけて社会学部卒業生約 24000 名のうち、7551 名を単純無作為抽出法により選び、自記式の郵送法により、調査をおこなった。調査主体は、関西学院大学社会学部 50 周年記念事業委員会である。回収数は 2169 票、回収率は 28.7% であった[1)]。

この調査では、社会学部卒業生にその学生時代の勉学や生活のことをたずねるとともに、卒業後のライフコースや学生時代に学んだこととの関係も質問している。本報告の主要な分析対象となるのは、以下のような質問である。

> 関西学院大学社会学部の学生教育は、どのようなものであるのが望ましいと思いますか。また関西学院大学社会学部の学生に対して、学生生活や社会生活を送る上で、何かアドバイスがあれば、ぜひお書きください。

回答者は自由記述方式でこの問いに答えている。

以下では、記述されたテキストを計量的に解析し、さらに他の質問項目との関係を分析していく。関連を見る項目は、回答者の基本的な属性や意識（性別、卒業年、初職、生活満足度[2)]）、大学に関わる経験や意識（学生時代の成績[3)]、在学中の満足度[4)]、学生時代の主な所属団体[5)]、関学

1）この調査の内容については、渡邊（2010, 2011）、岡本（2011）、中野（2010, 2011）も参照。

2）質問内容は以下の通り。
あなたは、現在のご自身の生活全般についてどの程度満足していますか。
1. 非常に満足している
2. 満足している
3. やや不満
4. 不満である
5. どちらでもない

3）質問内容は以下の通り。
あなたの学生生活における勉学面についてお尋ねします。総単位数に占める「優（80 点以上、「秀」も含む）」の割合はどれくらいでしたか。
1. ほとんど優だった
2. 優が多かった
3. 優が半分くらい
4. 優は少なかった
5. ほとんど優はなかった

4）質問内容は以下の通り。
在学中、次のような学習や経験に対してどの程度満足していましたか。（(a) 講義内容、(b) ゼミ内容、(c) 実習内容、(d) ゼミ担当教員の指導、(e) 大学の施設・環境、(f) 友人関係、(g) サークル・部活動、(h) アルバイト）
1. とても満足していた
2. まあ満足していた
3. どちらでもない
4. あまり満足していなかった
5. 満足していなかった
なお、(a)～(h) の 8 つの項目を主成分分析に投入して算出した主成分得点を、総合満足度とする。

5）質問内容は以下の通り。
在学中、あなたはどのような団体（サークル、部活）に参加していましたか。複数ある場合は、最も活動していたサークル、部活についてお答え下さい。
1. 体育系
2. 文化系
3. その他

への愛着度[6]）である。

自由記述の分析の中で、卒業年との関係をみることによって記述内容の経年変化がわかる。学生時代の経験との関係は、大学での自分自身の学びが大学のあるべき姿への態度にどのような影響を与えるかを明らかにする。職業経験との関係は、異なる社会経験や社会的立場が、大学のあるべき姿への態度に与える影響をあきらかにする。

3　分析

3. 1　記述の有無

まず最初に、問に対する自由記述回答の有無を集計してみる。全体の 36.6% には具体的記述がない[7]。反対に、63.4% の回答者はなんらかの具体的なアドバイスを記述している。回答者の諸属性（卒業年、性別、学生時代成績、初職）や意識（学生時代総合満足度、総合愛着度、生活満足度）と、記述の有無との関係を調べたのが表 1 である。これによれば、女性よりも男性の方が、無所属よりはなんらかの団体に属していた方が、学生時代の成績のよい人の方が、サービス業に就職した人よりは販売業に就職した人の方が、関学に愛着を感じる人の方が、より具体的な記述をする傾向にある。卒業年次や現在の生活満足度は記述の有無に影響がないといえる。

3. 2　具体的記述内容

では、具体的にどのような内容がアドバイスとして語られているのだろうか。自由記述の内容をテキスト分析した結果、表 2 のような単語が頻出単語として抽出された。テキストは、形態素解析ソフト MeCab[8] を利用して単語に分割した。

一般的な頻出単語、質問文中にあった単語（社会、学生、大学、関学など）を除けば、目につくのが「勉強」「経験」「学問」「人生」「友人」「就職」「仕事」などである。それぞれの単語についてその共起語を表 3 にまとめた[9]。

「勉強」に関しては、全体の 12.1%（無記述を除いた有意な回答のなかでは 18.9%）で記述されており、特徴的な共起語は、「もっと－勉強」、

表 1　具体的記述の有無に関するロジスティック回帰分析

	model 1
切片	0.98
卒業年	–0.00
性別（女性 d）	–
性別（男性 d）	0.33**
学生時代総合満足度	0.00
学生時代成績	0.22***
所属団体（無所属 d）	–
所属団体（体育系 d）	0.33·
所属団体（文化系 d）	0.60***
所属団体（その他 d）	0.70***
総合愛着度	0.09***
生活満足度	0.04
初職（サービス d）	–
初職（管理 d）	0.11
初職（事務 d）	–0.06
初職（主婦・無職・学生 d）	–0.00
初職（生産工程・労務 d）	0.08
初職（販売 d）	–0.54·
AIC :	2106.8

‘***’ : $p<.001$, ‘**’ : $p<0.01$, ‘*’ : $p<0.05$, ‘·’ : $p<0.10$

6）質問内容は以下の通り。
関西学院大学に対する以下の意見について、あなたご自身のお気持ちはどの程度当てはまりますか。（(a) 現在でも関学に強い結びつきを感じている、(b) 関学の OB・OG であることをよく意識する、(c) 関学の人たちが好きだ、(d) 関学を卒業したことを誇らしく感じている、(e) 関学に愛着を持っている、(f) できるなら関学に関係ある人と関わりたい、(g) 関学に思い入れがある、(h) 関学の OB・OG には、いい人が多いと思う、(i) 関学の OB・OG であることをうれしく思う）
1. とてもあてはまる
2. まああてはまる
3. どちらともいえない
4. あまりあてはまらない
5. あてはまらない

なお、(a)～(i) の 9 つの項目を主成分分析に投入して算出した主成分得点を、総合愛着度とする。

7）無回答および「特に無し」「特になし」「なし」を集計したもの。

8）MeCab については、http : //mecab.sourceforge.net/ を参照。辞書は、IPA 辞書を使用した。

9）前後 3 語以内にあり共起の指標 T 値が 1.65 以上となる単語。ただし、助詞等の頻度 600 回以上の高頻度語はリストから除外している。

表 2　頻出単語

こと	社会	学生	よう	人	自分	の	大学
1172	876	840	435	427	424	423	402
的	時代	生活	勉強	事	何	教育	もの
382	339	333	328	283	274	261	254
私	中	大切	今	学	時間	身	関学
237	231	224	208	207	196	196	172
社会学部	経験	時	力	知識	人間	それ	方
169	163	160	158	154	153	151	149
学問	人生	必要	卒業	活動	4	学部	授業
145	144	142	136	132	131	131	125
ため	等	年間	友人	興味	就職	講義	年
119	117	116	109	107	106	105	104
1	ゼミ	仕事	専門	分野	性	さ	後
101	101	98	98	97	92	91	90
自由	多く	関係	意識	将来	たくさん	福祉	アルバイト
90	87	83	82	80	79	78	76
能力	コミュニケーション	様	教養	先生	様々	在学	自身
72	70	69	68	68	68	67	66
為	資格	いろいろ	上	サークル	一	充実	企業
65	65	64	63	62	62	61	60
機会	積極	現在	心	実習	実践	体験	実社会
60	60	56	55	54	54	54	53
これ	精神	大事	当時	入学	環境	生	英語
52	52	52	52	52	50	50	49
重要	学校	気	チャレンジ				
49	48	48	47				

表 3　注目単語の共起語

【注目単語】	【勉強】	【経験】	【学問】	【友人】
共起語	もっと	積む	学	関係
	おく	いろいろ	のみ	作る
	しっかり	様々	という	多く
	あまり	できる	として	得る
	遊び	たくさん	面白い	つくる
	だけ	色々	役立つ	たくさん
	ろくに	多く	純粋	一生
			又は	時代
				大切

「しっかり－勉強」、「あまり－勉強」、「勉強－遊び」、「勉強－だけ」などがあがっている。回答者自身の学生時代を振り返って「もっと勉強（すればよかった）」「あまり勉強（しなかった）」という後悔ともとれる記述が一方にあり、現役学生へのアドバイスとして「しっかり勉強をしてほしい」または「勉強だけでなく」「勉強も遊びも」といった記述が目立つ。具体的には次のような記述がある。

> 今はどうかわかりませんが私たちのころは比較的ラクで楽しい学部というイメージでした。学生時代の 4 年間は人生の中で何より楽しく自由な時期だと思うので、そのまま楽しく過ごせる所であってほしい。でも私自身もう少しもっともっと勉強しておくべきだったと人生の中で何度も思うので、そういう後悔をしないために、そういう意識を高め、いろんなことを勉強する機会を与えてあげてほしいと思います。（1990 年代卒業、女性）

> 業種にもよると思いますが、大学の学問は純粋に学問でしかなく、社会生活、特に仕事において役に立つということは、ないように感じます。ただ、社会人になると、日々の仕事に追われ、生活に追われ、じっくり考えたり勉強する時間はなかなか取れませんので、限られた大学生活という貴重な時間を、勉強に、サークル活動に、バイトにと思いっきり楽しんでほしいと思います。勉強だけしていてもいけないし、遊びだけでも空しいと思います。バランスのとれた魅力的な社会人になってほしいです。（2000 年代卒業、女性）

「経験」に関しては、全体の 6.6%（無記述を除くと 10.4%）で記述されており、「経験－積む」、

「いろいろ－経験」、「様々－経験」など、多くの経験を積むことを推奨していることがわかる。具体的な記述は以下のとおり。

> 高校までは与えられた課題をこなすことが要求されるが、大学では自分で興味のあるものを見つけ、それについて研究することが要求される。明確な目的、意欲、根気強さなどを身に付けるとともに、アルバイトなどいろいろな経験をして人とのコミュニケーション能力やいろいろな場面での適応力を高めること、さらに情報のあふれた現代の中でも必要な情報を取捨選択する能力をつけることも重要だと思う。（1980年代卒業、女性）

「学問」に関しては、全体の5.7%（無記述を除いた8.9%）で記述されており、「面白い－学問」、「役立つ－学問」などが目立つ。「友人」に関しては、全体の4.1%（無記述を除いた6.3%）で記述されており、「友人－関係」、「友人－作る」などが目立つ。

3. 3　回答者の属性と記述内容の関係

では、こうした記述内容が回答者の属性とどのような関係をもっているのだろうか。まず、性別毎に記述内容に違いがあるかをみてみる。

表4は、性別と有意に関連する単語を抜き出したものである。これをみると、「職業」、「会社」、「企業」など男性は職業関係の記述が目立つ。また、「英語」、「コミュニケーション」、「関係」、なども男性の特徴語になっている。一方、女性に関しては、「勉強」、「授業」、「ゼミ」など学業に関するものが多いことがわかる。しかし、「就職」や「資格」は女性が記述することが多い。

表4　性別と有意に関連する単語

女性回答者に有意に多い単語	男性回答者に有意に多い単語
勉強，私，時間，たくさん，学生，大学，興味，授業，経験，卒業，大切，資格，福祉，ゼミ，自由，先生，実習，分野，就職，一番，色々，視野，貴重，学校，時期，出席，専攻，単位，魅力，子供，正直	思考，現代，職業，OB，解決，物，向上，経済，考え方，アドバイス，海外，重要，実践，会社，コミュニケーション，問題，実社会，能力，理解，英語，企業，人間

次に、卒業年代と使用単語の関係をみてみる。図2は、卒業年代毎の単語使用頻度表にもとづいた対応分析の結果である。大きく分けると、(1) 60年代、(2) 70～90年代、(3) 00年代の三クラスターが見てとれるだろう。60年代には、「友人」、「人間」、「関係」といった単語が近い。一方、00年代には、「講義」や「授業」などが近い。「就職」、「アルバイト」、「サークル」といった単語は、90年代と00年代の間にある。

図3は、学生時代の成績と使用単語の関係を対応分析したものである。「ほとんど優無し」の近辺に、「サークル」、「企業」、「仕事」、「英語」などがある。「就職」、「仕事」、「実社会」なども、比較的優が少ない方向にある。一方、「ほとんど優」や「優が多い」の近辺には、「教養」、「研究」、「ゼミ」などがある。

図4は、学生時代の所属団体と使用単語の関係を対応分析したものである。「無所属」の周囲には、「実社会」、「サークル」、「コミュニケーション」などがある。「体育系」と「文化系」の周囲には、勉強に関する単語が集まっており、特に「文化系」には「専門」、「学問」、「教養」、「勉学」などが近い。

以上のように、卒業生の諸属性毎に特徴的な言葉がいくつか見いだせるが、ここでの結果分析は各属性それぞれを単独に分析に投入した結果である。次に、いくつかの記述内容について、複数の属性を同時に含めた分析を行い、各属性がもつ独自の効果を推定していく。

3. 4　勉強に関する記述

まず、勉強に関する単語（勉強、学問、専門、教養）を「勉強系」とコード化し、勉強系の記述の有無に関連する変数を探ってみる。勉強系の記述は全体の20.9%にあり、無記述を除外した回答の中では32.6%が勉強系の単語に言及している。表5は、勉強系の記述の有無を被説明変数として諸属性変数によってlogistic回帰分析を行った結果である。これによれば、卒業年が近年になるほど勉強系の記述が減るということがわかる。また、男性よりは女性の方が勉強系の単語に言及することもわかる。

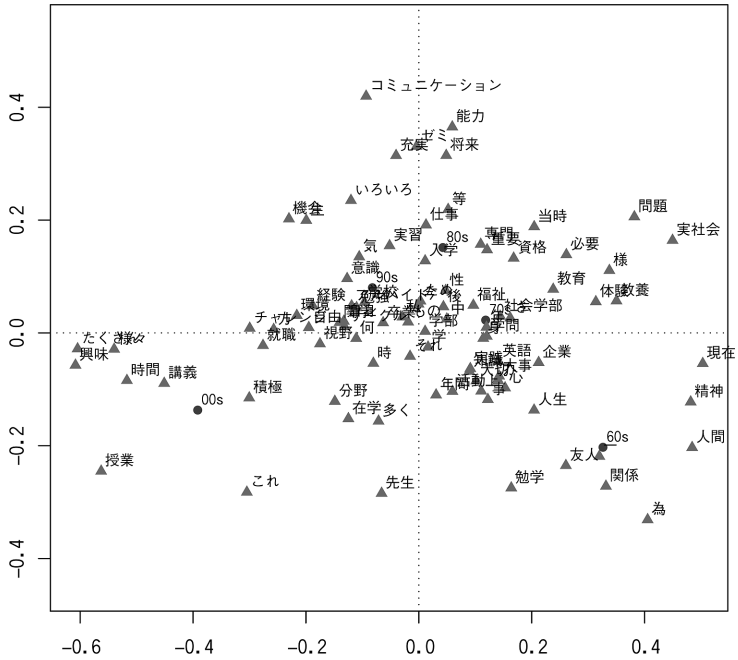

図 2　卒業年代と記述された単語の関係

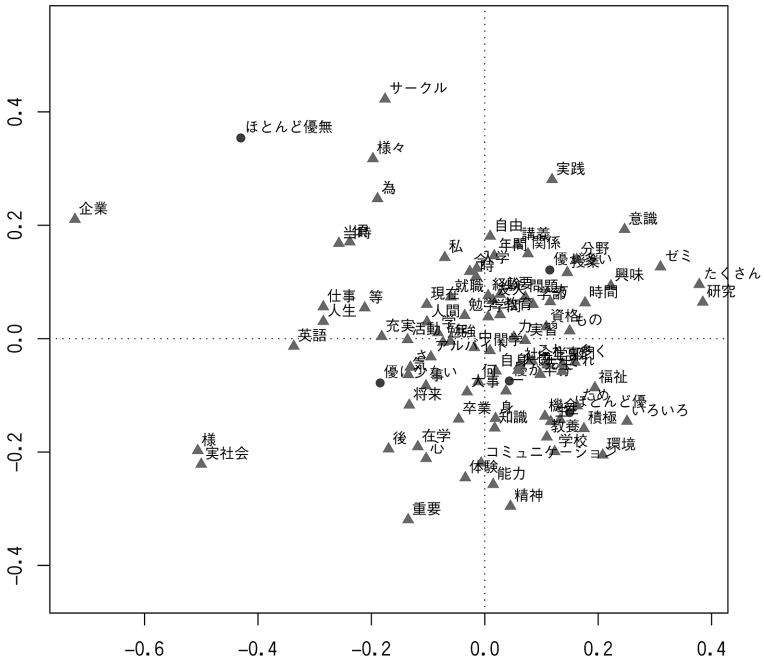

図 3　学生時代の成績と記述された単語の関係

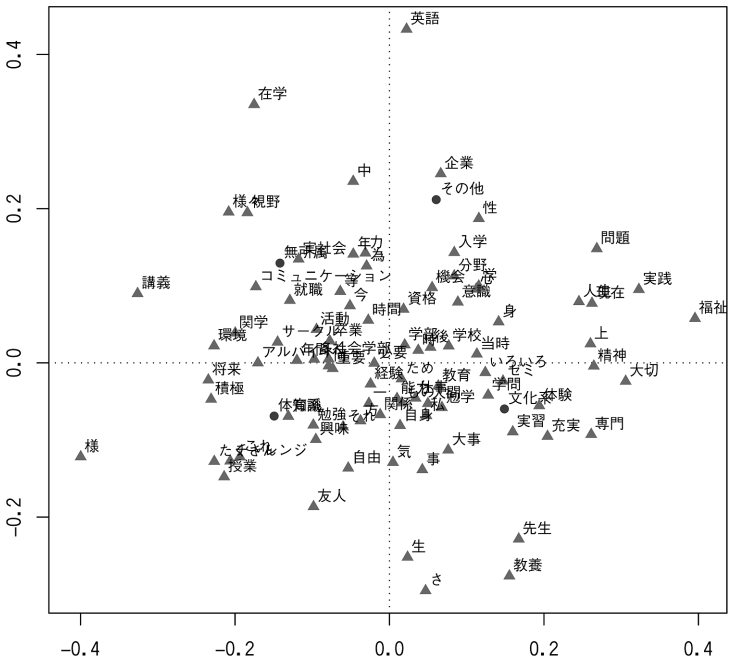

図 4　学生時代の所属団体と記述された単語の関係

表 5　「勉強系」記述の有無に関するロジスティック回帰分析

	model 1	model 2
切片	16.87·	21.74*
卒業年	−0.01·	−0.01*
性別（女性 d）	−	−
性別（男性 d）	−0.43**	−0.67***
学生時代総合満足度	−0.04	−0.05
学生時代成績	0.00	−0.10
所属団体（無所属 d）	−	−
所属団体（体育系 d）	0.40·	0.31
所属団体（文化系 d）	0.39·	0.16
所属団体（その他 d）	0.07	−0.23
総合愛着度	0.01	−0.03
生活満足度	0.04	0.03
初職（サービス d）	−	−
初職（管理 d）	0.33	0.34
初職（事務 d）	0.14	0.17
初職（主婦・無職・学生 d）	0.12	0.14
初職（生産工程・労務 d）	0.27	0.30
初職（販売 d）	0.18	0.58
AIC	1798.1	1424.8

‘***’ : $p<.001$, ‘**’ : $p<0.01$, ‘*’ : $p<0.05$, ‘·’ : $p<0.10$
model 1：記述無しを含んだ分析，model 2：記述無しを除外した分析

表 6　「経験系」記述の有無に関するロジスティック回帰分析

	model 1	model 2
切片	11.15	12.14
卒業年	−0.01	−0.01
性別（女性 d）	−	
性別（男性 d）	−0.27	−0.41*
学生時代総合満足度	0.06	0.06
学生時代成績	0.02	−0.06
所属団体（無所属 d）	−	
所属団体（体育系 d）	0.23	0.08
所属団体（文化系 d）	0.45	0.23
所属団体（その他 d）	0.29	0.01
総合愛着度	0.08*	0.05
生活満足度	−0.07	−0.08
初職（サービス d）	−	
初職（管理 d）	0.10	0.06
初職（事務 d）	0.17	0.18
初職（主婦・無職・学生 d）	0.11	0.11
初職（生産工程・労務 d）	0.30	0.29
初職（販売 d）	−0.32	−0.12
AIC	1272.6	1095.5

‘***’ : $p<.001$, ‘**’ : $p<0.01$, ‘*’ : $p<0.05$, ‘·’ : $p<0.10$
model 1：記述無しを含んだ分析，model 2：記述無しを除外した分析

3. 5　経験に関する記述

次に、経験に関する単語（経験、体験、友人）を「経験系」としてコード化して分析してみる。経験系の単語は、全体の 11.8% で記述されており、記述無しを除いた回答の中では 18.5% をしめる。表 6 によれば、経験系の記述を行うか否か

表 7　「就職系」記述の有無に関するロジスティック回帰分析

	model 1	model 2
切片	−26.11·	−26.70·
卒業年	0.01·	0.01·
性別（女性 d）	−	
性別（男性 d）	0.02	−0.10
学生時代総合満足度	−0.08	−0.08
学生時代成績	−0.10	−0.20*
所属団体（無所属 d）	−	
所属団体（体育系 d）	0.56·	0.42
所属団体（文化系 d）	0.52	0.28
所属団体（その他 d）	0.44	0.18
総合愛着度	0.01	−0.03
生活満足度	−0.07	−0.08
初職（サービス d）	−	
初職（管理 d）	0.21	0.23
初職（事務 d）	−0.15	−0.12
初職（主婦・無職・学生 d）	−0.17	−0.16
初職（生産工程・労務 d）	0.15	0.18
初職（販売 d）	−0.35	−0.07
AIC	1028.00	895.25

‘***’ : $p<.001$, ‘**’ : $p<0.01$, ‘*’ : $p<0.05$, ‘·’ : $p<0.10$
model 1：記述無しを含んだ分析，model 2：記述無しを除外した分析

は、性別のみが有意で、男性よりは女性の方が言及することが多いことがわかる。卒業年やその他の属性とは有意な関係がない。

3. 6　就職に関する記述

最後に、就職に関連する言葉（就職、仕事、企業）を就職系としてコード化して分析をしてみる。就職系の単語は、全体の 8.5% で記述されており、無回答を除いた回答の中では 13.3% をしめる。表 7 によれば、就職系の記述に関連しているのは、卒業年と学生時代の成績である。近年の卒業生ほど就職系の単語を使用する傾向にあり、また、学生時代の成績が悪い程、就職系の記述を行うことがわかる。性別との単集では、就職が女性、仕事や企業が男性に多い単語であった。しかし実際は、卒業年や成績が背後にある疑似相関であったと推測される。

4　まとめ

以上のように、関西学院大学社会学部卒業生調査のデータから、卒業生の視点で学部生・学部教育に望むものを探索的に記述してきた。

全体的な記述内容としては、勉強に関わること、経験に関わること、就職に関わることなどが多く見られた。属性との関係は、経験系の記述については卒業年の影響を受けていないが、勉強と就職に関する記述は卒業年の影響をうけている。卒業年が近年になるほど、勉強系の記述は減り、就職系の記述が増えている。また、学生時代の成績と有意に関係しているのは、就職系の記述だけであり、優の数が少なかった人ほど就職系の記述をする傾向にある。

こうした記述内容と属性との関係は何を意味するのであろうか。卒業年との関係について考えると、年齢効果と世代効果という二方向の解釈が可能であろう[10)]。年齢効果が現れているとすれば、就職したての卒業生や企業の中堅どころとして活躍している卒業生にとっては、就職や仕事に関することが大学にのぞむものとしてまず頭にうかび、一方で離職前後の年齢にある卒業生やその子どもが大学生にあたるような卒業生は、勉強や学問が大学の第一義として望まれるのかもしれない。一方、世代効果の現れとして卒業年の効果があるのであれば、創設期の 1960 年代卒業の世代から近年の 2000 年代卒業の世代まで、社会環境も大学をとりまく環境もそして学部の教育内容もそれぞれ変化していることが考えられる。

文部科学省によれば、四年制大学への進学率が 15% を初めて超えたのは 1964 年であり、2008 年についに 50% を超えた[11)]。先述のトロウの分類に従えば、関西学院大学社会学部の 50 年は、エリート段階にはじまり、マス段階を経て、ユニバーサル段階に達しているものといえる。つまり、大学という機関がもつ社会的な意味が 50 年の間に大きく変化しているものと考えられる。

日本の大学・大学生の変化を論じた文献は枚挙

10）さらにいえば、時代の効果もありうる。
11）学校基本調査の年次統計より。

に暇がない。例えば、『分数ができない大学生』（岡部・西村・戸瀬、1999）や、『下流指向』（内田、2007）など、一般書の話題になるほどに学生の質の変化が嘆かれている。就中、竹内（2011）は次のように指摘している。曰く、大学は「レジャーランド化」しており、その元凶は、少子化や進学率の上昇もさることながら、日本の大企業の採用方式が人的資本論的選抜（専門能力による選抜）ではなくスクリーニング理論的選抜（潜在能力による選抜）に傾倒していったことにある、と。つまり、「何を学んでいるのか。何を身につけているのか」ではなく「どこの大学に入学した（ような潜在能力がある）のか」で採用の可否を決めるようになったため、大学生が学ばなくなったというのである。同様の指摘は、苅谷（1997, 2011）もおこなっている。

> 1998 年以降、新卒就職者に占める四年生大学卒業者の割合が高卒者を抜いて、就職者の主流は大卒者になった。しかし、就職の仕組みは未だに「大学教育無用論」と呼べる状態が続いている。大学で何を学んだかが就職の際に問われない。どの学部を出たかもどんな成績を取ったかも。就職のチャンスは、実態としては今でも大学の偏差値ランクの影響を受ける。90 年代半ば以降、大学進学率が 50 %を超え、特に女子進学率が上昇した。男子大卒正社員を典型とした仕組みが大きく変わった。　　苅谷（2011）より引用

苅谷は独自の調査データにもとづいて議論しているが、今回本稿で紹介した分析も、竹内や苅谷の主張を裏付けるものとして解釈できるであろう。近年の卒業生程「勉強」に関するアドバイスをせず、逆に「就職」に関するアドバイスが増えている。そして、成績が悪いものほど「就職」に関するアドバイスを記述する傾向があるのだ。

こうした傾向は、例えば以下のような回答に端的に現れている。

> 単位認定だけでよい。教育はしなくてよい。無駄。入学後すぐ就職活動に専念するべきだ。（2000 年代卒業、男性）

> 社会学部にはゆるい考えを持った学生が多いように感じました。大学 3 年から就職の事を考えていては遅い。入学した時から就職の事を意識して生活すべき。大学は 4 年しか通えないけど、仕事は一生するものです。（2000 年代卒業、女性）

これらの回答は、非常に極端な記述ではある。しかし、大学教育の否定と就職のみを目標とするこうした回答のような感覚が一定程度現在の関西学院大学社会学部をとりまく環境の中に存在するということは、日常的に接する学生や企業の人事担当者とのやりとりの中で、感じられることである。

ただし、こうした「教育無用」「就活至上」ばかりがアドバイスにあったわけではない、例えば次のような論調の回答も複数あった。

> 社会学の原理的な理論と現実的な分野（産業、ジャーナリズム、福祉等）の両方をバランス良く学んでほしい。単に就職予備校的にとらえては、各種学校とかわらない。（1960 年代卒業、男性）

> 就職してしまうと、日々の仕事や生活に追われて、忙しいため自由な時間を持つ事の出来る学生時代に、思いっきり遊び思いっきり恋愛をし、思いっきり勉強をする事が社会人になってから、生じる様々な迷いや悩みを解決してくれるので、充実した学生生活を過ごされる事をおすすめします。（1980 年代卒業、女性）

本稿の今回の分析では、就職系の単語が回答中に含まれるか否かを被説明変数としており、就職に対してどのような態度・意見を表明するのかまでは弁別していない。上にあげた四つの回答も、すべて就職系の記述がある回答として計上されている。したがって、本稿で確実にいえることは、就職系の事柄が学部生へのアドバイスの ISSUE とみなされているかどうか、までである。

中野（2010）は、好成績者ほど社会学が役立つ場面として「仕事」をあげていることを指摘している。本稿の分析とあわせて考えれば、成績があまりよくなかった人は就職に関することを学生へ

のアドバイスとして考えているが、成績がよかった人はあえて就職に関することをアドバイスとして書かない。とはいえ、成績がよかった人は、社会学が仕事の上で「役立つ」ことを見いだしているのである。大学をとりまく環境の変化に応じて、時代とともに学部教育に求められるものが変化してきているとはいえ、社会学教育はけっして無用なものにはなっていないといってよいだろう。

ただし、具体的にどのような役立ちがあり、またどのような教育内容がどのような場面で意味を持つのか、またそれぞれの事柄にどのような態度や意見がこめられているのか、といったことはさらなる分析と考察が必要となる。また稿を改めて論じたい。

文献

金子元久，1994,「結論（卒業生からみた広島大学の教育：1993 年卒業生調査から）」，*Reviews In Higher Education,* 27：55–58.

苅谷剛彦，1997,「大衆化時代の大学進学：〈価値多元化社会〉における選抜と大学教育」，教育學研究，64(3)：327–336.

苅谷剛彦，2011,「『学歴インフレ』脱却急げ」，日本経済新聞朝刊（2011 年 4 月 20 日）.

中野康人，2010,「社会学は『役立つ』学問か　－関西学院大学社会学部卒業生調査の分析（2）－」，『関西学院大学社会学部紀要』，110：23–32.

中野康人，2011,「関学生の Mastery for Service－関西学院大学社会学部卒業生調査の分析（5）－」，『関西学院大学社会学部紀要』，111：121–136.

小方直幸，1994,「大学教育の経験とその評価（卒業生からみた広島大学の教育：1993 年卒業生調査から）」，*Reviews In Higher Education,* 27：35–54.

岡部恒治・西村和雄・戸瀬信之，1999,『分数ができない大学生』，東洋経済新報社.

岡本卓也，2011,「思い出の風景としてのキャンパス－関西学院大学社会学部卒業生調査の分析（3）－」，『関西学院大学社会学部紀要』，111：87–98.

竹内洋，2011,『大学の下流化』，NTT 出版.

マーチン・トロウ（天野郁夫，喜多村和之訳），1976,『高学歴社会の大学－エリートからマスへ』，東京大学出版会.

内田樹，2007,『下流志向』，講談社.

渡邊勉，2010,「大卒者の入職過程と職業キャリア　－関西学院大学社会学部卒業生調査の分析（1）－」，『関西学院大学社会学部紀要』，110：1–21.

渡邊勉，2011,「大卒者のライフコース－関西学院大学社会学部卒業生調査の分析（4）－」，『関西学院大学社会学部紀要』，111：99–120.

山内乾史，1994,「職務と大学教育（卒業生からみた広島大学の教育：1993 年卒業生調査から）」，*Reviews In Higher Education,* 27：23–34.

吉本圭一，2007,「卒業生を通した『教育の成果』の点検・評価方法の研究」，『大学評価・学位研究』，5：77–107.